

近代的ナシヨナリストとしての福沢先生

(一九五〇年講演・速記稿)

丸山眞男

解説

松沢 弘陽

講演の主催者、行われた日時、場所などおよびこの速記稿の性質については、別項「丸山眞男文庫所蔵の福沢諭吉に関する草稿・速記稿類の概況」中の説明を参照。速記の質はあまり良くなく、単語の誤記はかなり多く、また終りの方では、速記の文には意味をなさないほどに混乱している箇所がある。ここに復刻するに当たっては、明瞭な誤記は断りなく訂正し、必要なことばを「」で括弧で補った。単語の誤記と文章の乱れをはじめ、全体の不備については丸山の以下の講義と論文を参照してただし。

また八か所にわたる、丸山が史料の引用をした部分を空白にした箇

所があり、引用の長さに応じる行数が示されているが、これは毎日新聞社の野紙に記された速記の行数である。それらの空白のうち丸山が引く福沢の文章が確実に推定できる箇所は、『福沢諭吉全集』に当って復元した。また丸山が、本文中に典拠を示さずに福沢の文を引用している場合についても同様の扱いをした。

この講演に関連する丸山の文章として、前年一九四九年の東洋政治思想史講義(『丸山眞男講義録』第二冊)「日本政治思想史一九四九」(東京大学出版会、一九九九年)の第二章「近代的国民主義の古典的形成二 福沢諭吉」および序説「国民ネーションおよび国民主義ナショナリズムについての若干の予備的考察 五 ナシヨナリズムの類型」のうち「ヨーロッパ型ナシヨナリズムとアジア型ナシヨナリズムの歴史的類型の相違」と併行する面があり、この講義の福沢に関連する部分についての草稿断片(資料番号四〇五一六)がある。同じ一九四九年に、おそらくこの講義に先

立って発表された「近代日本思想史における国家理性の問題」(1・未完)、『丸山眞男集』第四卷所収)の一部も本講演と併行する。さらに週れば、本号に発表される「一九四七年度「東洋政治思想史」講義原稿」のうち第三章第三節「福沢諭吉」も福沢を扱う。また、この講演の二年後、一九五二年七月に刊行された『福沢諭吉選集』第四卷(岩波書店)の「解題」の一部は、この講演を承けて発展する面をもつ。本稿の校訂に当っては、これらを参照した。

丸山眞男は『世界』一九四六年五月号に発表した、「超国家主義の論理と心理」によって広く世に知られるにいたった。他方、「福沢諭吉の儒教批判」(『東京帝国大学学術大観』一九四二年)、「福沢に於ける秩序と人間」(『三田新聞』一九四三年一月)、「福沢諭吉の哲学——とくにその時事批判との関連」(『国家学会雑誌』一九四七年九月)と続く一連の福沢研究は、『三田新聞』に載った短文を別とすれば、いずれも東京帝国大学の学術刊行物と法学部の紀要に発表されて、その読者も自から主に大学内と大学関係者に限られた。交詢社福沢文庫開設記念講演、慶応義塾大学福沢先生研究会が創設した石河賞の受賞、それに答える同研究会主催の講演、さらに大阪での慶応義塾の福沢諭吉五十回忌記念行事として行われた講演は、慶応義塾が、また三十年代半ばで、それまで慶応義塾では知られていなかった丸山の福沢研究に注目し、それを世に押し出してゆく動きを現しており、この動きは、慶応義塾による『福沢諭吉選集』第四卷の「解題」執筆へ連なるのである。そのような慶応義塾との交渉、慶応義塾の後押しは、丸山の福沢研究

に推進力を与え、それを生涯を通じる重要な研究テーマに発展させる上で、大きな役割を果たしたといえるであろう。

近代的ナショナリストとしての福沢先生

(一九五〇年講演・速記稿)

丸山眞男

私は福沢先生に関する専門の研究者ではありません。たゞ明治以後の政治思想史に関し、先生に特に注意を払っております関係上、そういう勉強をやっている一人であります。でありますから福沢先生の思想というものについて専門的に論ずるものではありません。題名の「近代的ナショナリストとしての福沢先生」ということについて暫くお話し申上げます。

今日きわめて多面的な福沢先生の思想のうちナショナリストの一面をなぜ取上げたかということは、私の最後の話でよくおわかりになるだろうと思います。

アジア世界におけるナショナリズムの特徴ということをきわめて簡単に問題として提供したいと思えます。

ナショナリズムという言葉は実に訳し難い言葉であります。只今田畑(忍)先生が「国家主義」という風にいわれました。国家主義も一つのナショナリズムであります。あるいは民族主義。ナショナリズムという言葉は暗黒の面と光明の面、いわば両刃の刃といえるのであり

ます。私が近代的ナシヨナリズム、近代的という形容詞を使うゆえんはここにありません。近代民族国家の勃興期において近代民族国家を支えるところの推進させるところの最も健康な精神としてのナシヨナリズムというものを問題にするのであります。この近代民族国家の最大の精神的支柱であるナシヨナリズム、ヨーロッパにおきましては御承知のように十五、六世紀、中世のカトリック社会の解体により、ローマ法王、ローマ帝国という二つの単一の秩序が形成されておったところが、ルネッサンス、宗教改革により普遍的な中世秩序が解体しまして、今日のような民族を単位とする絶対主義国家というものが近世のはじめに形成された。これがいわゆるナシヨナリズムとしての思想の誕生する出発点となったのであります。ヨーロッパにおけるナシヨナリズムというものには一つの大きな共通性がある。つまり欧州民族国家というものを調整している精神的な伝統、相互に近いという意識、ヨーロッパという一つの統一地帯が今日まで区々に残っております。いわゆるキリスト教的ヨーロッパ全体の共同体をなしている、その共同体のなかで各民族の国家が構成をなし民族国家を意識し合う。こういう形態をとってナシヨナリズムは発展してきたわけでありまして、元来一つの世界であったものが分裂して幾多の国家が生まれてお互に意識し合う、こういう民族意識がヨーロッパに生れてきたわけでありませう。ところがアジアにおけるナシヨナリズムの特徴というものはこれとは非常に違っているのであります。

元来一つの世界が分裂してそのなかで互に個性を意識し合うとい

うことでなく、ここでは外から迫ってくる力、外から国際社会に引入れることに對する抵抗、ここに非常な素朴な形でナシヨナリズムが發生した。つまり世界のなかにおける自分、世界における自国というものを意識するのではなくして、むしろ世界のなか引入れる外からの力に對する、セクシヨナルなナシヨナリズムの素朴な感情が起つてきた。これはアジアにおける共通の特色であつて、外国勢力のなかに引入れる、いわゆる国際社会のなかに引入れる、こういうことに對するセクシヨナルなものは御承知のように幕末の攘夷論という形をとつて現れた。ここにヨーロッパで見られないナシヨナリズムの特徴と、そこにおいていろ／＼な困難というものが自らまつわってくる。このアジアにおける近代国家観を理解しないでは日本や中国のいろ／＼の主張というものの十分な理解は可能でない。つまり第一はインターナシヨナリズムとナシヨナリズムとの調和性。ヨーロッパにおいては一つの秩序があつて民族国家が形成されている、一つの世界の分裂からできているのである。そこにおいて自分というもの自国というものを意識する。こういう過程をとるわけでありませう。アジアにおいては、インターナシヨナリズムとナシヨナリズムの調和はきわめて困難である。ナシヨナリズムがしば／＼孤立化、排外主義となつて現れるわけでありませう。特にこれは旧来今までのアジアの国を支配していたところの支配層のなかにまず現れてくる。

幕末における攘夷論は支配階級の間から生れてきたものであつて、非常に素朴な形でナシヨナリズムの端緒的な形態であるといふことが

いえる。これはいわば島国の孤立意識で決してこれを近代的国民的自覚というものと同視してはいけない。つまり世界に引入れることに對する旧来の世界を守ろうとする、國際社会に引入れることに對する引入れられまいとする一つの抵抗、こういう形を攘夷論というものがとるわけでありませう。つまり異質な外来に對して本能的な自己防衛というものがここに起る。そこで主として今までの古い世界がゆらぐことに最大の脅威を感ずるところの、その当時の支配階級によってこういう感情が担われ、またリードされるといふことになる。つまりそういった攘夷論、外國勢力が入ってくることによって外國勢力に直面することによって、一つの封建的な旧秩序が脅威され、古い社会が解体されることによって自分の支配的な特権というものが動揺する。これを防衛しようとする本能、これがまず攘夷論の形となって現れてくるわけで、従つてこれは決して一般民衆の主體的能動的な感情によつて担われたものではない。一般民衆に支えられた愛国心といったものは非常に質が違つてくるということがまず理解されるのであります。つまり新しく迫ってくる外國勢力に對して古い世界を守ろうとするわけで、守ろうとする古い世界の構造が身分的に地域的に分裂して、きわめて嚴重な身分的な秩序ができてお互に隔離されている。そこでこういう身分的な分裂により古い世界が對外防衛能力をもたないということになる。

もう一つは外から迫ってくるころの新しい勢力は、決して単に新しいというだけでなく、それはまさに産業革命が産み出した高度の技

術文明、高度の近代文明が現実に迫ってくる、新しい力が今の古い世界に圧倒的に迫ってくる。つまり今までの古い世界、日本、中国の古い勢力を防衛するためには、古い世界を變革しなければ自己防衛ができない。新しい世界、ヨーロッパ世界からの脅威を取除くためにはヨーロッパ世界の形式を取入れなければならない矛盾に立たされるわけでありませう。これがアジアのナシヨナリズムに共通の特色である。こういう困難なかに福沢諭吉という非常に偉大な思想家が現れ、そして日本の近代的ナシヨナリズムの担い手、ある意味では最後の担い手となつたということ、これを我々は忘れてはなりません。

福沢諭吉先生が日本の近代的なナシヨナリズムを明瞭に定式化した最初である。維新前後啓蒙思想家は輩出しましたが福沢先生ほど日本の國民的獨立という命題に自覺的に終始した思想家はなかつたといわれている。どんな微細なヨーロッパ文明をも消化している。幕末以來、國際的重圧から日本を救いヨーロッパ諸國に拮抗するだけの高い地位をもつた近代的國家にしたい、こういう目標に作り上げてゆく。しかも方法的に一貫してほとんど執拗なまでにこの命題を繰返しているといふ点で他の思想家に類を見ないといつてもいい。のみならず福沢先生はヨーロッパ世界と日本というものを直接に對決させたわけではなく、何よりもまずヨーロッパ的な進歩に對する東洋的な停滯、ヨーロッパ社会のめざましい進歩に對して日本を近代化するということと東洋全体の近代化をするということを不可分に考へる。東洋世界の近代化を度外視して日本の獨立問題は考へられない、こういう考へ方。

東洋世界がヨーロッパ世界の植地的な位置に陥り、植地的な隷従の地位に陥っている。この状態を打破することなくしては日本という国家の窮極の安全と独立はあり得ないということ、また逆に日本が近代国家として形成され、健全に発達していくことなくしては東洋諸民族の解放はあり得ない、東洋諸民族をヨーロッパ帝国主義から解放する方法はない。こういう二つの命題が一つになる、これが他の思想家に比してもっとも先生をきわ立たせる特色であるゆえんであります。

(中国分割予言について約五行)

ヨーロッパ世界から東洋世界を守るために東洋世界における古い秩序を打破しなければならない。外からの新しい世界に対して自己防衛のため新しい原理を入れなければならない。先生は国内の封建的な抑圧の打破ということと国際的な隷従関係の打破、これは二つの問題でなく一つの問題である、国内の解放、国際的な独立ということを一本の線で結んでいる。これが古典的なナシヨナリズムとして福沢先生を特色付けるゆえんであると思います。

(条約改正、東洋植民地化の問題約七行)

これは私は単なるヤユではないと思う。国内の解放、国際的な独立というものが、これは二つの問題でなくして一つの問題であるということが理解できると思うのであります。ところがさらにまたここに非常に困難な問題が起ってくる。それはアジアにおきましては元来一つの世界のなかで自国の独立性を意識するという形をとらない。一方において封建的な支配階級によって担われる攘夷論というきわめて猛烈な

主張となつて国内であえぐ。そこでまず第一に封建的な攘夷論、島国根性というものの打破ということが第一の課題となってくる。これはどういふことかという、世界のなかにおける日本、世界の外における日本でなくして世界のなかにおける日本ということに自覚する。こういう過程をとらないナシヨナリズム、猛烈な排外主義、島国根性から、世界のなかにおける日本の意識を植付けなければならない。そういう過程を経ないでは本当のナシヨナリズム、本当の愛国心が出てこない。そこで第一に世界のなかの日本という意識を植付けるといふことは当然である。

福沢先生のいう意味では、ナシヨナリズムはインターナシヨナリズムの傾向を強くおびている。国内に盛上る盲目的な攘夷論、この盲目的な攘夷論を打破することがいわゆる開国論となつた。福沢先生が開国論というものを、近代ナシヨナリズムの成立を前提として開国論をとりあげるといふ一つの自覚をもつておられるということは、例えば慶応二年に島津祐太郎宛の文にこういふ風にいわれている。

「人は旅行して初て自分の生国を他国と比較し、随て人の欲にて本国の事を自慢する心も生ずるものなり。今の日本人も歐羅巴辺に旅をさしてヨク／＼諸外国と我本国とを見較べなば、日本国の威を落さず世界中に対して外聞を張るの本趣意を解す可き乎。」

(或云隨筆)

つまり人々は他国に旅行して自分の生れた国と比較して見てはじめてそこに本当の自分の国に対する自覚というものが生れてくる。つまり

自分が世界の中にいるという自覚を与え、今までの自国中心を打破させることなくしては本当の近代的愛国心というものが生れてこない。世界のなかにあるという自覚をしなければならぬという論理がはつきり浮び出てくるわけであります。こういう風に維新前から福沢先生の近代的なナショナリズム思想は、未だ理論的には形成しておらなかったが、内部的に成熟を遂げておいたのであります。

維新前後のめまぐるしい変化は御承知のように、廃藩置県あるいは身分的な制度の解放、穢多非人の解放、廃刀令などは近代的なナショナリズムを形成させる客観的な条件となつたわけであります。こうした変革をしなければ国際社会においてどういふ日本の独立を保ち得ない。そのことがいかに明治維新後におけるめまぐるしい変革を遂行させる一つの大きな心理的な推進力になつていたかということは、詳しく申しませんが、非常に我々の想像以上のものがあります。そういう具体的な傾向というものは明治維新以後における、とにかくあの当時においては我国は未曾有の変化といわれた改革を遂行した。福沢先生をして近代的ナショナリズムの理論的形成をさせる一つの社会的基盤であつたということができるのであります。他方ここにおいて福沢先生の典型的な非常にバランスのとれたナショナリズムの理論が形成されたということは、明治維新直後におけるいわば思想的な真空ということを考えなければならぬ。古い社会を根本的に変革しなければ国際社会における日本の独立は確保してゆけない。日本の独立を国際社会に確保するためにしようがない。今日考えられない不公平

な日本国内体制の変化を期さなければ、日本が独立できない。こういう可能性の幅が明治二十年以後においては狭くなつた。明治初期におきましてはその可能性の幅が広く、日本がどのようにも変化できるやう、そこに真空状態というものがあつた当時、バランスのとれた先生の理論というものが形成された、こう思うのであります。

こういう現実の情勢を背景にしまして福沢先生は理論的ナショナリズムを定式化された。先生はナショナリズムの基礎、ナショナリズムの国民的特性ということ、「国体」といふことばで表現されております。国体とは何か。民族が相集まつて独立国家を形成し外国の支配を受けない、外国人に政権を奪われぬということであつて、先生の国体を維持するということは皇統連綿として続くことでもなければ、政治様式でもなければ、言語、宗教が変らないという意味でもなかつた。「国体を保つとは自国の政権を失わざることなり」(『文明論之概略』卷之一)、つまり我国は古今以来金甌無欠であるというのは、「開闢以來国体を全うして、外人に政権を奪われた事なきの一事に在るのみ」(同前)。外国人の支配を受けなかつたところに金甌無欠の国体というゆえんがある。自国の政権に他国のコントロールを受けると国体の断絶ということになり、先生は全日本人が死力をつくして他国人よりの侵害から守ることを強調された。往事政権は王政から武家政へとしばしば移動したが、それは国内の移動であつた。しかし政権が日本を去ることは王室より政権が去るということよりはるかに重大である。王室を去ることはまた復帰する機会もあります。しかし日本国を去つ

たところの政權は永久に日本国に帰つてこない。こういうことがあつてはならないということが福沢先生の腦裏を去らない問題であつた。

先生は東洋諸國の近代化は、日本を含めて自力で近代化を行わなければならぬ、自力で封建思想を打破して自分の力で東洋の近代化を遂行しなければ外国人によつて遂行されることになる、と強く主張されたのであります。

今我日本の諸港に西洋各國の船艦を泊し、陸上には洪大なる商館を建て、其有様は殆ど西洋諸國の港に異ならず、盛なりと云ふ可し。然るに事理に暗き愚人は、此盛なる有様を目撃して、今や五洲の人民、我國法の寛大なるを慕い、争て皇國に輻湊せざるはなし、我貿易の日に盛にして我文明の月に進むは、諸港の有様を見して知る可しなど、て、得色を為す者なきに非ず。大なる誤解ならずや。外國人は皇國に輻湊したるに非ず、其皇國の茶と絹絲とに輻湊したるなり。諸港の盛なるは文明の物に相違なしと雖ども、港の船は外國の船なり、陸の商館は外國人の住居なり、我獨立文明には少しも關係するものに非ず。或は又無産の山師が外國人の元金を用ひて國中に取引を広くし、其所得を悉皆金主の利益に歸して商売繁昌の景氣を示すものあり。或は外國に金を借用して其金を以て外國より物を買入れ、其物を國內に排列して文明の觀を為すものあり。石室鉄橋船艦銃砲の類、是れなり。我日本は文明の生國に非ずして、其寄留地と云ふ可きのみ。」(『文明論之概略』卷之六)

「國中の人民に獨立の氣力なきときは、一國獨立の權義を伸るること能はず。……或人云く、民はこれに由らしむ可しこれを知らしむ可からず、世の中は目くら千人目あき千人なれば、智者上に在て諸民を支配し上の意に従はしめて可なりと。此議論は孔子様の流儀なれども、其実は大に非なり。……もと此國の人民、主客の二様に分れ、主人たる者は千人の智者にて、よきやうに國を支配し、其余の者は悉皆何も知らざる客分なり。既に客分とあれば固より心配も少なく、唯主人にのみ依りすがりて身に引受くることなきゆゑ、國を患ふことも主人の如くならざるは必然、実に水くさき有様なり。國內の事なれば兎も角もなれども、一旦外國と戰爭などの事あらば其不都合なること思ひ見るべし。……右の次第に付、外國に対して我國を守らんには、自由獨立の氣風を全國に充満せしめ、國中の人々貴賤上下の別なく、其國を自分の身の上に引受け、智者も愚者も目くらも目あきも、各其の國人たるの分を尽さざる可らず。」(『學問のすゝめ』三編)

ここにおいてはナショナリズムとリベリズムが結合している。ここにおいてはじめて政府に対する依頼心を一掃し、政治權力に対する、人民の政府である、我々の政府であるという自覚を植付けなければならない。そのためには政府は、我々の「会社」であるという言葉を使つた。政府は我々の政府であるという自覚を植付けるためには、こういう言葉を使わなければならなかつたのであります。従来國家權力に依存していた人民を人民主權國の主体に引上げるために、先生は封建的

な権力への卑屈に対して抗争したわけでありませう。従って、こういう封建的な抑圧に対する個人の自由を解放するということと、国際社会において独立することの關係が当然問題になってくる。ここにナショナリズム・国民主義とリベリズム・個人主義とが矛盾しない一本の線に繋がれ、ナショナリズムとインターナショナリズムは矛盾しない同じ一つの線で繋がれるわけでありませう。つまり個人と国家、国際社会というこの三つは一つの同じ原理の關係にある。先生の基本的なものの考えは、いわゆる啓蒙的自然法を一步も出ない。先生のナショナリズムというものは結局近代国家一般の図式的な考え方に過ぎない。特に日本の状況に相応した具体性をもたないということになる。ところが先生は明治八年『文明論之概略』においてこういう考え方から一歩抜け出し、つまり国際的關係については予定調和的な樂觀論を排して明白に一つの理論、国家の政治的実存の独自性という問題に着目している。

(個人と国家の關係約八行)

かかる非合理的な世界状況の現実の真つ只中において日本の独立を確保してゆく、好むと好まざるは我々の感情である、こういうことを非常に痛切にいわれている。先生の国際關係論は明治十一年の『通俗國權論』において「百卷の万国公法は数門の大砲に若かず、幾冊の和親條約は一筐の彈薬に若かず」と言い切るところまで来た。先生は我国の外交上の不利を除くため條約の改正を強調されたが、一方では條約は一片の紙きれであるといわれている。

福沢先生が「唐人往來」の万国公法思想論で万国の同等の地位を強調してから我國の万国公法思想はまさに百八十度の大転換を遂げたかのように見える。しかし、国際社会における日本国家を存立させてゆかなければならない、こういうことが明治十四、五年頃から日清戦争にいたる間に強調されるようになってきた。かかる國權論が福沢先生の古典的なバランスのとれたナショナリズムをどの程度イデオロギー化したか。

私の強調したいのはこういう國權論が、福沢先生の大陸發展、中国および朝鮮に対する一貫した非常に強硬な態度、こういうものが、後々の日本の國際的な發展の仕方、あるいは超ナショナリズムというものと一体どこが違うかということを理解しなければ福沢先生の國權論の全体が理解できない。まず根本的な違いは、東洋世界に対する政策の根本に近代化を不可欠としたのが福沢先生の命題である。東洋世界の近代化というものは不可欠の存在であった。東洋の近代化は東洋人自らの手で行われなければならない。ヨーロッパ世界により近代化されるとことになる。そこにおいてヨーロッパの技術文化も入ってくれば東洋世界は植民地になるという、こういう状態を打破して自らの手で近代化するよりほかない。満清政府は幕府にもまして猛烈な排外主義、孤立主義で固まっていた一切近代化を寄せつけない。この満清政府というものもが現存する限り東洋の近代化は望めない。満清政府を打倒することなくして東洋世界は近代化されない、東洋世界を改革して立派な國家群にするということではできない。そのために先生は中国および朝鮮

に対して非常に強硬論をとった。このことを忘れてはならない。そこに東洋世界の近代化の根本問題があったことでもあります。その点で先生の大陸膨張論は、帝国主義的な膨張ではなかったのです。

日本が東洋世界で一応立派な独立国となった以上は自分の国だけを思つてはならない。東洋のインド、支那、朝鮮、あるいは植民地的な諸国にもおよぼして、日本を立派な独立国に仕立るとともにアジア諸国に近代的改革を施して、アジア諸国が連繫してヨーロッパ帝国主義勢力より守つてゆこうというのが先生の窮極の目的である。この点において後の日本の帝国主義的な超ナショナリズムと違うのであります。つぎに違う点は大陸に対する積極政策、国家論を強調している間にも国内を近代化することを全く放棄したのではないということ。明治十五年十二月七日から十二日にわたって『時事新報』に「東洋の政略果して如何せん」という有名な論文を掲載している。ここにおいて先生は官民調和の必要を力説せられ、内にあつては民権伸張を主張し外に対して軍備を拡充して国権の伸張を主張された。この論文では在野の官権新聞で藩閥政権を擁護するところのものと自分の説とが根本において違うことも主張しそれに利用されることを拒否されています。

先生は国内の近代化をますます進めないでは東洋の啓蒙といった大きな仕事はとてできないということを考えられた。国内近代化と国権伸張は並行して問題になっていたのであります。先生の国権拡張論は文明の進歩という部門に制限されておりました。国権拡張に対して

先生は大陸に対する帝国主義的な発展を肯定するにいたつたかのような言辞をされた際においても、先生は一向反動の排外主義は肯定しなかつたのであります。先生の国権論というものはいわゆる玄洋社的な国権論とは根本を分つ点であると考えられる。明治十四年の政変を契機に政府は民権運動を弾圧するため教育方針を一変し、反動的な教育を行った。このときの先生の怒りは大変なものであります。

(文引用)〔他の場合と異なり、引用の主題や長さの説明はない〕先生は官民調和を説き大陸発展を説く真只中において、こういうことをいっておられることを忘れてはならない。また軍備拡張ということ唱えたことはもちろんあります。先生の国権拡張の根本の考え方はいわゆる武を優位にすることになつたことは疑いを容れない。先生が一番恐れられたのは武断政治の到来でありました。先生は国権論とともに分権ということも考えられていたことを我々は忘れてはならない。従つて国力の発展についても総てにバランスのとれた発展でなければならぬ。軍備だけが異常な発展をなし、経済など各種のものが相伴わない不均衡な発展をもつとも心配しておられたのであります。

(経済、教育あらゆるものが発達して先生の主張がはじめて生れる約十行)

丁度一八八〇年来世界はいわゆる帝国主義段階に入りました。ヨーロッパ列国が中国に向つて帝国主義の鋒先を集中した。こういう時代において日本の独立を確保してゆくことは非常に困難な状況に

ありまして、福沢先生はしばしば国際関係において行過ぎる言辭を弄したということは事実であります。この意味というものを我々はよく理解しなければならぬ。それは、今申しました後の超ナショナリズムというものは非常に違ふのであります。先生が中国分割論を唱えたことは、もつとも極端な形で先生の根本の原則を逸脱している。しかしその場合でも、先生のもの考え方には後のいわゆる東亜新秩序論に移した時代と非常に違う点があります。先生は現実認識の問題と彼自身の価値判断とを絶えず区別している。いいかえれば、戦争は国家間の抗争で権謀術策、権力の闘争である。これに対して正義ということはあくまで高遠な理想である。しかるに、後の大東亜新秩序、東洋平和のためという美辭麗句は、実は日本帝國主義の進出を道徳的に美化する権謀術策の産物である。

我々は戦争から学ぶべき二つの問題の危険にさらされる。一つは単に抽象的なオプティミズム、これはお坊ちゃんの議論で現実に根を下さず、美しい夢のような理想を語っている。他の一つは苛烈な国際的な政治的対立という悪しき現実の認識がその肯定になってしまふ。一方の抽象的なオプティミズム、アイデアリズムと反対で、国際正義とか平和の理想は権謀術策の仮面に過ぎないとする。

(以下終りまで國家の獨立と個人の自由について先生の考え方約十五行)